

17世紀フランス・リュート音楽研究(2)  
—ジャック・ガロのリュート曲集およびその緒言をめぐって—  
The Study of French Lute Music in the Seventeenth Century (Part2)  
—on the lute book by Jacques Gallot and its prefaces—

小川伊作  
Isaku Ogawa

**Abstract**

The lute book of Jacques Gallot, published in the second half of the seventeenth century in Paris is, along with the two books of Denis Gaultier, very important in the development of French lute music. It is important not because of its repertoire, but because of the information on lute music itself, its ornamentation, and the social conditions surrounding the lute.

In this paper I have examined the researches from the end of the nineteenth century until the present, and examined Gallot's lute book by focusing on the author and the age in which the book was published. I then translated and annotated the *advertissement*, dedication, and instructions.

0. 序

17世紀後半にパリで出版されたジャック・ガロ Jacques Gallot<sup>1</sup>のリュート曲集 (*Pièces de luth composées sur différents Modes par Jacques de Gallot*; 完全なタイトルは後出7.を参照; 以下 *Gallot Pièces* と表記) は、そこに収められている音楽作品のみならず、当時のリュート音楽とそれをとり巻く環境を知るために必要な情報を含む献辞、緒言およびリュート奏法の手引きゆえに、ゴティエの2冊の曲集<sup>2</sup>と共にフランス・リュート音楽の消長を語る上で、欠く事のできない重要性を持っている。しかし同曲集は刊年を欠いている事、ガロと呼ばれる音楽家が当時複数いたことから、作者・成立年の特定に定説を得るには至らず、同曲集の位置付けも不明確なままであった。しかし1987年にフランス国立科学研究所より刊行されたガロ作品集 (*Œuvres des Gallot*) では、一次資料に基づく最新の研究により、*Gallot Pièces* をめぐる先の諸問題に新たな説を提案している。本稿では同曲集に関する従来の研究および最新の研究を紹介し、その作者、成立年に若干の考察を加え、同曲集の献辞、緒言およびリュート奏法の手引きの翻訳及び注解を行った。

1. *Gallot Pièces* の作者について

*Gallot Pièces* のタイトルページに、'Copposées PAR IACQUES DE GALLOT' と記されている (図版1) ことから、この曲集の作者が「ジャック・ド・ガロ Jacques de Gallot」なる

人物であることは確かである。しかし問題はこの曲集が印刷された時代<sup>3</sup>、ガロと呼ばれる音楽家、とりわけ同名のリユート奏者が複数いたことである。このため従来、複数のガロ相互の縁戚関係および *Gallot Pièces* の作者の特定に混乱をきたしていたのである。

### 1.1. ミルランの手稿にみられる3人のガロの関係について

現在音楽家ガロに関する第1の資料として挙げられるのはルネ・ミルラン René Milleran が書き残した手稿 (Bibliothèque Nationale, Paris, Rés.823; 以下 MilleranMS) に記されたリユート奏者の表である (MilleranMS, f.2r; 図版2)。そこにはミルランの師であるムトンの名前に続いて「ネーヴのゴティエ氏 [=老ゴティエ] およびパリとイギリスのゴティエ氏 [=ドニ・ゴティエおよびジャック・ゴティエ] 二人兄弟のガロ氏 アンジェの老ガロの息子、若ガロ」と記されている<sup>4</sup>。この中でガロについて確実な情報は「二人兄弟のガロ」の存在と、「アンジェの老ガロの息子、若ガロ Gallot le Jeune」の存在だけである。他方 MilleranMS に収められている作品で‘Gallot’を含む帰属には‘du V.(mons<sup>r</sup>.) gallot d’Angers’、‘du V(ieux). gallot de Paris’の二種類が見られる。次にこれらの帰属を持つ曲名を示す (曲名の綴りはオリジナル通り)：

‘du V.(mons <sup>r</sup> .) gallot d’Angers’	Le Canon Courante ballet polonois ballet polonois transposée La Gallote Courante
‘du V(ieux). gallot de Paris’	Gavote La Lucesse Alemande La Royale Sarabande

ブルネ M.Brenet は3人のガロのうち一人をポーランド王ヴラディスラフ四世に仕え、1647年に没した人物アントワーヌ・ガロ Antoine Gallot と考え、MilleranMS に含まれる‘ballet polonois’の作者と断定<sup>5</sup>。したがって‘ballet polonois’の作曲者 Gallot d’Angers はアントワーヌ・ガロであるとした。さらにブルネは Gallot le jeune を vieux Gallot de Paris の息子と考えた (以上 Brenet1899, p.66) が、MilleranMS の記述を正しいとすれば Gallot le Jeune は Gallot d’Angers の息子なのである。ブルネのこの考え方は後の研究に強い影響を与えた。ロランシー Laurencie およびベッティヒャー W.Bötticher はブルネ同様 Gallot le jeune を vieux Gallot de Paris の息子としている。(Laurencie1928, p.110; Bötticher MGG, p.1329; ただし MGG の補遺版では Gallot le Jeune を Gallot d’Angers の息子と訂正している [Band XVI, 1979, p.407])。Bordas および New Grove では MilleranMS の記述にしたがい Gallot le Jeune を Gallot d’Angers の息子としている。アントワーヌについてはすべての資料が Gallot d’Angers と同一人物であるとしている。

### 1.2. *Gallot Pièces* の作者としてのガロ

主要資料にみられる *Gallot Pièces* の作曲者の特定は以下のとおりである (年代順)：

Laurencie1928                      Jacques de Gallot.

Tessier1930	Jacques de Gallot
Bötticher MGG	Gallot le Jeune
Radke1960	Jacques de Gallot
Callahan1963	Jacques de Gallot
Rave1972	Jacques de Gallot
Lesure1978	Gallot le Jeune
New Grove	Jacques de Gallot
Bordas	Jacques de Gallot
<i>Œuvres des Gallot</i>	Jacques de Gallot

しかしラトケが述べているように (Radke1960, p.53)、*Gallot Pièces* 中のいくつかの作品が複数の手稿中では v(ieux) Gallot de Paris、あるいは v(ieux) Gallot、あるいは単に Gallot と記されていること。さらに MilleranMS に収められている作品と他の手稿の同一作品の帰属表記を比較すると、vieux Gallot、vieux Gallot de Paris と Jacques de Gallot をほとんどの場合同一人物とみなすことができる<sup>6</sup>。したがってほぼ確実に *Gallot Pièces* の作者 Jacques de Gallot は、すなわち vieux Gallot de Paris であることができよう。

### 1.3. 再び MilleranMS にみられる 3 人のガロの関係について

ところで MilleranMS に記された 3 人のガロの 1 人として、同手稿中の作品の帰属 'le Vieux Gallot d'Angers' がその標題 'ballet polonois' ゆえに、ポーランド国王に仕えた人物、アントワヌ・ガロと結び付けて考えられてきた (この考えはブルネが記して以来 New Grove まで継承されている)。またベッティヒャーやルシュール F. Lesure が述べているように 'Jacques de Gallot' と同性同名の 'Gallot le Jeune' が実在したのであろうか<sup>7</sup>。マシプ Massip の新研究は暫定的な形ながら、一次資料の検討の上に立ち、こうした従来の定説に新たな問題提起をおこなっている (Massip1987) ので、以下その内容を紹介していく。

マシプによれば、ガロ特定の決め手になったものは 1684 年 7 月 27 日付けの結婚契約書である。サインをしたのは「リュートその他の楽器の奏者・教師 maître joueur de luth et autres instruments de musique」であるピエール・ガロ Pierre Gallot であった。この証書によればピエール・ガロは「同職業の de lad. profession」故アレクサンドル・ガロ Alexandre Gallot の息子であった。立会人の中には「同じく器楽奏者・教師 aussy me joueur d'instruments」のおじの Jean Gallot がいた。契約書にはもともと J. Gallot とのみ記されていたが、後に公証人によって「Jean」と補筆された。J というイニシャルに対し Jean は最も一般的な姓であったことを考えるならば、この人物が Jacques Gallot という名前であった可能性がある<sup>8</sup>。MilleranMS に記されたガロと同数の 3 人のガロがこの契約書に現れており、その職業、住所が同一であることを認めるならば 'vieux Gallot de Paris' はジャック・ガロ、'Vieux Gallot d'Angers' はアレクサンド

ル・ガロ、‘Gallot le Jeune’はピエール・ガロということになる。そしてアントワーヌ・ガロはこの3人との血縁関係を欠くことになる (Massip1987, XV-XVI)。

## 2. ジャック・ガロについて

ジャック・ガロについて経歴等詳細は不明であり、現在の所彼についての主な情報源は *Gallot Pièces* である。彼がエヌモン・ゴティエ Ennemond Gaultier (1575-1651) に教えを受けたこと<sup>9</sup>は、後述する *Gallot Pièces* の緒言で彼が「妬む人々が私を老ゴティエを標榜したと非難するとき、彼らに満足する理由があるのである。これほど私の作品にとって名誉になることはないからである。私は自分が幸福だと思っている。ゴティエが私がしたことに対し私に与えてくれた諸規則を人々が認めてくれるからだ」と述べていることから推察される。また *Mercurie Galant* 誌に彼の作品 ‘Courante l’Eternelle’が掲載されたが、その際の紹介文から、彼が外国旅行をしていたこと、毎週土曜日にコンサートを開催していたことが伺える：

「私は皆さんがガロ氏を高く評価していることを知ったので、彼のリュート曲集より1曲お届けする。これは私が手に入れ彫版させたものである。この熟練した巨匠は彼が行なった長い旅行から戻り、パリで演奏会を持った。この演奏会は彼が毎週土曜日公開で行なったものである。彼はしばらくしたらそれを再開することになるだろう。そして人々はその演奏の精妙さばかりでなく、指の構えとその的確さにおいて見事なこの卓抜なる人物を聴く楽しみを得ることになる」

(*Mercurie Galant*, 1683.1. p.248)

## 3. ジャック・ガロの没年について

ジャック・ガロの没年は従来1690年とされてきた。その根拠はアブラム・デュ・プラデル Abraham du Pradel の *Livre commode contenant les adresses de la ville de Paris* が彼に言及していないことに基づいていた。ところがマシプによれば、1691年版にはガロがきちんと言及されている：「ムトン、ガロ、ジャクソンの各氏は高名なリュート教師であるが、住所は不明である」。1692年版ではギター教師のなかに *Galet* なる人物が現れるが、彼の住所は「cul-de-sac Saint Sulpice」<sup>10</sup>となっているのである。そして1695-96年の税金の目録の中に音楽家としてガロの名前がくり返し見られることを指摘している (Massip1987, XXI)。他方ルイ十四世の宮廷音楽家、テオルプ、ギター奏者のロベール・ド・ヴィゼ Robert de Visée (17世紀後半～18世紀始め) が作曲したジャック・ガロに捧げたトンボーがプザンソンの図書館所蔵の手稿 (Bibliothèque municipale, Besançon, 279. 152/153；以下 SaiznayMS) に収められていること<sup>11</sup>から、没年の範囲を限定できるとしている。1695-96年の税金の目録の中のガロがジャックと同一と考えるならば、彼の没年は1696-1699年ということになるだろう。

## 4. *Gallot Pièces* の成立年について

*Gallot Pièces* は出版年が記されていない。それゆえ同曲集の成立年についてはこれまで様々な説が提出されてきた。ここでは最初に従来主要諸説を紹介整理し、次にそれらを検討・考

察してみたい。

Laurencie1928	1673年頃
BötticherMGG	1673-1675年
Radke1960	1673-1675年
Callahan1963	1672-1673年
Rave1972	1673-1675年
Lesure1978	1684年
New Grove	1670年以降
Bordas	1670年頃
<i>Œvres des Gallot</i>	1681-83年

上記 *Gallot Pièces* の成立年は、1673年前後と1680年代の二つに分類することができる。前者は次に述べる2つの要因に基づいている。第1はこの曲集に含まれる死に関連する作品2曲の存在である。:

Allemande le bout de l'an de Mr Gautier

Courante Tombeau de Madame

当時'M<sup>r</sup> Gautier(Gaultier)'と呼ばれていたゴティエはドニ・ゴティエ Denis Gaultier であったことから、前者の被献呈者が確定される。ドニ・ゴティエの没年は1672年であった。後者はほぼ確実にオルレアン公爵夫人アンリエット・ダングルテールを偲んで作曲されたと考えられているが、その没年は1670年であった。第2の要因はこの曲集がエストレ伯 comte d'Estrée に献呈されていることである。タイトルページには'A MONSEIGNEVRLE COMTE DESTRÉE/ Vice admiral de france' (エストレ伯閣下/フランス小將へ) と記されている。ジャン・デストレ Jean d'Estrée (1624-1707) は1669年11月12日に小將の地位に就いている。

後者1680年代の根拠は、ひとつはやはりエストレ伯に関連したものである。最も新しい年代を提案したルシュールによれば、小將の地位に就いたのはジャンではなくヴィクトル・マリ・デストレ Victor-Marie d'Estrée (1660-1737) であり、その日付は1684年なのである (Lesure1978)。「1681-83年」という日付を提案したマシブはルシュールの案を紹介しつつも、資料から実際にヴィクトル・マリがその地位に就いた時期が1689年であること。しかし1686年に没したコンデ公に捧げられた'Tombeau de M.le Prince de Condé'はこの曲集にはみられず、後の手稿資料にのみ見られる<sup>12</sup>ことから1684年という年代は退けている。そして再び被献呈者をジャン・デストレとしたうえで、小將就任時ではなく彼が元帥に就任した1681年を同曲集の成立と結び付けている。この傍証としてガロが献辞文中に「陛下がこの王国で第1の職責を果たすために・・・」と記していること。*Mercure galant* 誌が1683年1月に'Courante l'Eternelle'を掲載したこと (前出) を指摘している (Massip1987,XIX)。

上記の諸案の中で「1672-73年」を提案したキャラハン Callahan は、「1673年」という下限を定めた理由を、*Gallot Pièces* をすべて写した手稿の成立年 (Rés. Vm<sup>7</sup>370,1672-3年成立) に求めているが<sup>13</sup>、*Gallot Pièces* をすべて写した手稿は SaiznayMS であり、その成立年は1699年頃と考えられることから、キャラハン説は退けられる。マシブ説は、例え献辞文中に「第1の職責」という記述があったとしても、元帥に着任した人物に献呈した曲集のタイトルページに、

古い肩書きである「小將」をわざわざ記す積極的な理由は無いように思われる。また *Mercur galant* 誌への掲載をもって年代決定の傍証とするならば、1670年および1672年に没した人物に献呈された作品が、この曲集に含まれていることの説明ができない。もし作曲後単に時間が経過しただけであると説明するならば、逆の見方、すなわち1670年代はじめに成立した曲集から、10年後に雑誌に転載されたと考えても不都合はないはずである。さらに献辞文中の「第1の職責」という表現は、献辞文の性格を考慮すれば、必ずしも小將にふさわしくないとは言えないのではないだろうか。結論としてはジャンの小將就任後なるべく早い時期、しかしドニ・ゴティエが没した1672年以降が *Gallot Pièces* の成立年と考えられよう。

## 5. ジャック・ガロのリュート曲集

今回は一次資料として現在フランス国立図書館所蔵の資料 (Rés3001) と、Minkoff出版のファクシミリの二つ<sup>14</sup>、二次資料としてCallahan1963を使用した (キャラハンは一次資料としてLibrary of Congress所蔵の資料 [M140. G2 Case] を使用しており、論文中に原文が全て転載されている)。タイトルページには「種々の旋法で」と記されているが、実際にはfis mollとa mollの二つの調で書かれており、全31曲が調別に配置されている (表1 ; 但しPréludeは2曲)。第1に注目されるのは各曲に付されたタイトルである。1660年以前に印刷されたリュート曲集では、曲のタイトルはAllemande, Couranteといった曲種を表す語に限られることが一般的であったのに対し、ここではそのほとんどに献辞的・暗示的なタイトルが付されているのである (31曲中28曲)。これはいうまでもなくこの世紀前半よりフランスで流行したプレシオジテの伝統を反映したものである。極めて私的なサークルの中で手作りされたリュート曲集 (*La Rhétorique des dieux*. c. 1652) の性格を継承したものともいえるだろう (ちなみに*La Rhétorique des dieux* では56曲中30曲に副題が付されている。*Gallot Pièces* の副題についての詳細は後出表2)。第2には印刷されたタブラチュアでは最初期のメヌエットとガヴォットの例が見られることである (第6曲、第7曲、第22曲)。ゴティエの2冊の曲集に収められた、装飾法を含む演奏法についての手引きはこの曲集においてもみられるが、演奏に際し基本的な事項の説明と、タブラチュアに用いられた記号の説明とが分離されている点が異なる。

## 6. 結 び

ゴティエの2冊の曲集と相前後して出版されたガロの*Gallot Pièces*は、その構成、含まれる曲種の面で共通性を有する。他方献辞的・暗示的な副題の積極的な採用は、17世紀フランス独自のサロン文化の強い影響を示すものといえる。各舞曲の配列は、やはりアルマンド、クラント、サラバンドが中心となり、そこにジグ、カナリ等が挿入されている。各曲は、既に述べたように調別にまとめられ、fis moll15曲、a moll16曲 (さらにa mollの曲はallemandeで区分すると、Préludeを除き各々7曲、3曲、6曲にグルーピングされる)に分けられている点、やはりフランス独自のゆるやかな舞踏組曲の伝統を反映しているといえよう。

リュート奏法について述べた部分は、先に触れたように二つに分けて記されているが、表記法は別として、ゴティエの曲集のものとはほぼ共通した内容といってよい。ゴティエにあって *Gallot Pièces* に明らかに欠けているのはエトッフエだけである。特に押弦における保指、親指

の弾弦の際親指を次の弦に留めること、練習はゆっくりと行う事という3点が共通している事は、これらがリュート演奏の基礎として重要性を持っていたことの証しであろう<sup>15</sup>。

緒言の中でガロが、「あるいは私の作品を合奏の形で演奏してみたいと望むなら、作曲者の家にくれば、あらゆる楽器のための高音部譜表と低音部譜表に書かれた楽譜が全部揃っている」と記していることは、大変に興味深い。なぜならば1680年にはリュート曲を通常の五線譜表に記譜することを提唱した著作が出版されるからである（Perrine, *Livre de musique pour le luth*, Paris, 1680；さらに18世紀に入るとロベール・ド・ヴィゼも自作のテオルブおよびリュート作品を大譜表にした曲集を出版している；*Pièces de théorbe et de luth mises en partition dessus et basse*, Paris, 1716）。この緒言によれば私的な形ながら、大譜表によるリュート作品の記譜がこれらの著作の刊行を待たずして試みられていた可能性があるからである。なおこの *Gallot Pièces* の作者は、タブラチュアの最後に第2の曲集を出版する用意のあることを述べている：「もし神が私を生かしてくださるのなら、私は人を不愉快にすることのない第2の本を出版しよう Sy dieu me laisse viure ie doneray vn Second, liure qui ne d'splaira pas」。しかし現在までのところ、この曲集の存在は知られていない。

表 1

ページ No.	ピース No.	タイトル	調
5- 6	1	Prélude	fis
7- 8	2	Entrée le Sommeil de du Fault	fis
9-10	3	Allemande la belle Lucrèce	fis
11-12	4	Courante la Nonpareille	fis
13-14	5	Sarabande la Divine	fis
15-16	6	Gavotte la Dauphine	fis
17-18	7	Menuet la Cigale	fis
19-20	8	Gigue la grande Virago	fis
21-22	9	Sarabande la belle Flamande	fis
23-24	10	Courante Tombeau de Madame	fis
25-28	11	Chaconne le Doge de Venise	fis
29-30	12	Courante la Pomme d'or	fis
31-34	13	Canarie la contre Chèvre	fis
35-36	14	Courante la Pigeonne, avec double	fis
37-38	15	Courante l'Eternelle	fis
39-40	16	Prélude	a
41-42	17	Allemande le bout de l'an de M <sup>r</sup> Gautier	a
43-44	18	Courante la Cigogne	a
45-46	19	Gigue le Dogue d'Angleterre	a
47-48	20	Sarabande la pièce de huit heures	a
49-50	21	Canaries les Castagnettes	a

51-52	22	Gavotte la Jalousée	a
53-54	23	Allemande départ de M <sup>r</sup> Emont	a
55-56	24	Courante la Meurtrière, avec double	a
57-58	25	Chaconne la Montespan	a
59-60	26	Allemande Oesope ridicule	a
61-62	27	Volte la Brugeoise	a
63-64	28	Gigue la Levrette	a
65-68	29	Courante la Bordelaise, avec double	a
69-70	30	Gigue la belle Comtesse de Berka	a
71-77	31	Folies d'Espagne	a

表2 Gallot Piècesの副題について

以下にGallot Piècesに含まれる作品に付された副題を分類、意味を記した。なお副題の解釈についてはモニク・ロランMonique Rollinの記述（*Œuvres de Gallot*, XXXVII-XXXIX）から訳出、必要に応じ筆者が [ ] 内に補筆した。

### 1. 肖像（身近な人物）

#### no.4 La Nonpareille [比類なき人]

ニノン・ド・ランクロ（1620-1705）の渾名。彼女自身サロンを主宰していた。彼女は父のリュート奏者ランクロ [(1592/3-1649)] と同様リュートを奏した。[父のランクロはドニ・ゴティエと同じサロンに関係していた]

#### no.6 La Dauphine

フランス皇太子 [ルイ十四世の第1王子] ルイ [・ド・フランス (1661-1711)] の妻マリクリスティーン・ド・バヴィエール (1660-1690)。

#### no.10 Madame

オルレアン公爵夫人アンリエット・アンヌ・ダングルテール [(1644-1670)；ルイ十四世の弟フィリップ・ドルレ안의妃]。1670年の彼女の悲劇的な死はフランス全土を動揺させた。かくして彼女にもトンボーが献上された。

#### no.11 Le Doge de Venise [ヴェネツィアの総督]

この標題は明らかに当時ヴェネツィア共和国に対して与えられていた威光を暗示している。なによりもヴィルサイユの大運河の上に「小ヴェネツィア」の建造をみている。

#### no.17 Le bout de l'an de M<sup>r</sup> Gautier [ゴティエ氏の年の終り]

[1672年に没したドニ・ゴティエを追悼したものと思われる]

#### no.19 Le Dogue d'Angleterre [イギリスの番犬]

恐らくバッキンガム公 [(子；1628-1687)] に与えられた渾名であろう

#### no.23 Départ de M<sup>r</sup> Emont<sup>16</sup> [エモン氏との別れ]

#### no.25 La Montespan

[フランス王ルイ十四世の愛人フランソワーズ・アテナイス (1641-1707)]

#### no.30 La bell Comtesse de Berka [ベルカの美しい伯爵夫人]



ヴェネツィア共和国駐在ドイツ外交官婦人。

## 2. 歴史上・神話上の人物

no.3 La belle Lucrece [美しきルクレツィア]

ローマの偉大なる夫人 [タルクイニウス・コラティヌスの妻 (BC6c.)]。[ローマ最後の王の] 息子に陵辱を受けた後自殺した。

no.8 La grande Virago [偉大なる女傑]

ミネルヴァとディアヌに与えられた渾名

no.12 La Pomme d'or [金のリンゴ]

アタランテを思い起こさせる[ギリシア神話上の人物。極めて足が速く、結婚の条件として、自分より足の速いものの妻になるが敗者は殺す約束をした。あるとき競争相手がアフロディテから授けられた3個の金のリングを走っている時に投げ、アタランテがそれを拾っている間に勝利を得て夫になった。]

no.26 Oesope ridicule [滑稽なイソップ]

その機知で有名な奴隷 [古代ギリシアのアイソポス]

## 3. 日常的な事柄

no.20 La pièce de huit heures [8時の曲 (部位)]

サーロインを指す。これは8時の夕食に供される牛の部位である

## 4. リュリのスペクタクルに関連するもの

no.2 Le Sommeil de du Fault [デュフォの眠り<sup>17</sup>]

リュリの悲歌劇を暗示している。その中の様々なシンフォニアが‘Sommeil’のタイトルを持っている (*Les Amants magnifiques*(1670)そしてとりわけ *Atys*(1676)；ガロは特にこれらに靈感を得た)

## 5. その他

no.5 La Divine [神]

no.15 L'Eternelle [神]

no.22 La Jalousée [嫉妬深い女性]

no.24 La Meurtrière [殺人者]

## 6. 動物

no.7 La Cigale [セミ]

no.13 La contre Chèvre [反?ヤギ]

no.14 La Pigeonne [雌鳩]

no.18 La Cigogne [こうのとり]

no.28 La Levrette [グレーハウンド]

7. 上記以外

- no.9 La belle Flamande [美しいフランドルの女性]  
 no.21 Les Castagnettes [カスタネット]  
 no.27 La Brugeoise [ベルギーの女性]  
 no.29 La Bordelaise [ボルドーの女性]

[論文注]

- (1)あるいはジャック・ド・ガロ Jacques de Gallot。本稿では一貫して「ジャック・ガロ」を使用。生没年は不明だが、没年に関しては本文3.参照。  
 (2)拙稿、『17世紀フランス・リュート音楽研究(1)／ドニ・ゴティエの2冊のリュート曲集をめぐって』、大分県立芸術短期大学研究紀要第27巻(1989)：pp.27-48。  
 (3)17世紀中～後期であることは調弦・レパートリーから判断して間違いはない。*Gallot Pièces*には高音側から *f-d'-a-f-d-A-G-F-E-D-C* と調弦される、いわゆる「新調弦」を施した11コース・リュートが必要。この調弦は印刷譜では1638年の曲集(P.Ballard, *Tablature de luth des différents auteurs sur les accords nouveaux*)に最初に現れ、以後18世紀まで用いられた。ただし18世紀に入るとコース数は13コースまで増加する。またアルマンド、クラント、サラバンドを主体とした舞踏組曲形式による曲配置、Prélude non mesuré(「拍子付けの無い前奏曲」と訳される事もある。1631年のP.Ballardの曲集に最初に現れる)もこの曲集の年代を規定している。  
 (4)原文...M.Gautier sieur de/Neve et Gautier de Paris/et d'Angleterre-Mess<sup>rs</sup>. Gallots les deux/freres/M.Gallot le jeune fils/de M.le v. Gallot d'/Angers... [sic]  
 (5)'polonois'(現代綴りでは'polonais')はフランス語で「ポーランドの」の意味。  
 (6)ラトケが問題にしているのは次の作品である。各曲の手稿での作曲者表記は右列に記した。典拠は *Œuvres des Gallot* の concordance に拠る。

1. *Gallot Pièces* に含まれる作品

タイトル	出典	作曲者表記
Allemande la belle Lucrece	Saizenay I, p.213	du Vieux Gallot
	....., p.409	du V. Gallot
	MilleranMS, ff.59'-60	du V. gallot de paris
	Brossard, ff.179'-180	de Mr Gallot
	Krems. L79, ff.102'-103	de Mons. Gallot
Courante la Nonpareille	Barbe, pp.134-135	de Gallot
	Saizenay I, p.410	du V. Gallot
Gavotte la Duphine	Barbe, pp.142-143	de Gallot
	Saizenay I, p.208	du Vieux Gallot
	....., p.214	du vieux Gallot
	MilleranMS, f.61'	du Vieux Gallot de paris
	Brossard, f.178	de gallot
Courante l'Eternelle	Barbe, p.138	de Gallot
	Saizenay I, p.419	du V. Gallot
	Barbe, p.140	de Gallot

Sarabande la pièce de huit heures	Saizenay II, p.130	du V. Gallot
	Barbe, p.34	de Gallot
Courante les Castagnettes	Saizenay II, p.132	du V. Gallot
	Barbe, p.35	de Gallot
	Göttweig I, f.88	du V. Gallot
Chaconne las Montespan	Saizenay II, pp.100-101	du V. Gallot
	Barbe, p.47	de Gallot
	Göttweig I, f.83	du V. Gallot

2. MilleranMSに含まれる作品

Sarabande La Royale du v. Gallot de Paris(f.60')

Lei II 614, ff.38'-39

du V. Gallot

Praha Kk83, pp.40-41

du Vieux Gallot

Barbe, p.139

Gallot

Barbe : Paris, Bibliothèque Nationale, Rés. Vmb.ms.7; 蔵書印'J.B.Barbe, conseiller de la Courdes Aydes'

BrossardMS : 後出注 (13)

GöttweigI : Benediktinerstift, Musikarchiv, Ms.no.1 (1735-1738)

Krems.L79 : Kremsmunster, Benediktinerstift bibl., Ms. 79(c.1690-1710)

Lei.II 614 : Leipzig, Musikbibl. der Stadt. Mus.ms.II 614(17世紀末)

- (7)MGGでは同名のJacques de Gallotがle vieuxとle jeuneの二人いるとして、それぞれ(I)、(II)としている。Lesure1978はその序文の最後に'Jacques le jeune'と記している。
- (8)なおこの手稿の成立年は17世紀最後の10年間、'Gallot'は'le jeune'と考えられている (Rave1972, pp.306-309)。
- (9)なおMGGは当初ドニ・ゴティエの弟子としていたが、補遺版ではエヌモン・ゴティエの弟子と改めている (MGG XVI,p.407)。ただしJacques (II)。
- (10)ピエール・ガロはSaint-Sulpice教区に居住していた。またジャック・ガロはピエールのそばに住んでいたと考えられる (Massip1987, XX)。
- (11)Saizenay I, p.55 (この手稿の成立は1699年; C.Chauvel: Introduction in *Manuscrit Vaudry de Saizenay*, Minkoff, Genève, 1980)
- (12)SanznayI, pp.112-113; Lei.II614, ff.64'-65.
- (13)プロッサールSébastien de Brossard (1655-1730; フランスの音楽理論家、作曲家、聖職者)による手稿。今日では音楽辞典(後出翻訳注(4)参照)の編者として知られる。同手稿は現在フランス国立図書館所蔵。タイトルページには「S.deプロッサールにより1672、73年云々にカーンそのほかの土地で編まれ記されたリュート曲集Pieces de luth/recueillies et écrites/a Caën et autres lieux/es années 1672:73etc./Par S.de Brossard」と記されている。本稿ではBrossardMSと表記。
- (14)Rés3001は献辞、緒言、手引きのページが手書きであるが、ルシュールはその点についてフ

クシミリの序文では言及していない。

- (15)親指の弾弦を示す記号（|）はゴティエの最初の曲集にのみ見られ、残りの曲集では触れられていないが、曲中には用いられている。また2音を同時に弾弦する指示はゴティエの2冊目の曲集にのみ現れる。
- (16)Claud Emon (Aymond, Hémon, Edmonとも綴る)。1648-55年の間リュート奏者として活躍していた記録が残っている。彼の作品はBarbe, Brossard, Milleran, Vaudry de Saizenayなどの手稿に残されている (F.Lesure: 'Recherches sur les luthistes parisiens a l'époque de Louis XIII' in *Le Luth et sa Musique*, Paris: CNRS, 1958, p.222)。
- (17)du faut, du Faux, dufay, du feaux, du foyとも綴る。生没年は不明。彼の名前はMilleranMSではガロの次に位置し、ティトン・デュ・ティエ Titon du Tillet (1677-1762) の *Le Parnasse François* (1732)、またル・サージュ・ド・リシェ Le Sage de Richée (1695年頃活躍) の *Cabinet der Lauten* (1695)、*Mary Burwell Lute Tutor* (c.1660-72)、バロンE.G.Baron (1696-1760) の著作 (1727) でもその名が言及され、作品もP.バラールの2冊の曲集 (1631、1638) をはじめ、各地の手稿に多数残されており、フランス・リュート楽派を代表する人物の一人であった。

## 7. 翻 訳

*PIECES DE LVTH/Composées sur differens Modes/PAR IACQVES DE GALLOT/Auec Les folies d'Espagne Enrichies de plusieurs beaux couplets/DEDIÉES/A MONSEIGNEVR LE COMTE DESTRÉE/viceadmiral de france/A PARIS/chez HBonneüil, Rue aulard audessus de la Halle aux/curs vers les SS. Innocens.* (出版日付なし。綴りはオリジナル通り)。

## 閣 下

かの陛下がこの王国で第一の職責を果たすためにご自身でなされた選択はフランス全土にあなたの美点に負うところの正義を知らしめます。私が自分の曲集を世に出そうとあなたの名においてすることは、やはり私の無謀さを陛下に知られてしまうことになるでしょう。たとえ人が陛下の名前がこの上なく偉大な名声を得ており、この作品を重要なものにするのに十分であることを知らず、私が公衆に陛下の趣味であったという確信を持って公にするこの曲集を構成する作品にあなたが与えた賛意の後初めて、陛下、私がそうしたことを人が知らずとも、それらの作品は陛下自身のものであるし、私が持っている情熱が深い尊敬と共にあることで、公衆はやはり賞賛するでしょう。

閣下

あなたのきわめて卑しく忠実な僕  
J. ガロ

## 緒 言

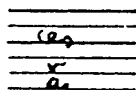
私は公衆のために自分の著作を彫版した。そうすることで彼らの楽しみに寄与するためである。運よくうまく彼らの気に入るようなことがあれば結構だが、そうならなくてもそれはその〔著作の〕罪でも私の罪でもない。私の意図は常に変わらないのである。私はこの目的を正当化するためにも、批判を予告するためにも雄弁家を務めなければならないとは考えていない。批判を招くものは良いものだけであり、下らないものはそれに値しないのである。わたしはもう妬みを避けるふりはすまい。私はそのことを嘆くどころか、妬む人々が私を老ゴティエを標榜したとって非難するとき、彼らに満足する理由があるのである。これほど私の作品にとって名誉になることはないからである。私は自分が幸福だと思っている。ゴティエが私がしたことに対し私に与えてくれた諸規則を人々が認めてくれるからだ。作曲においても演奏においてもその規則から離れたものは、下らぬ趣味の中へと落ちてしまった。そのことは楽譜の中で分かることである。もし熱心な方が私の言うことを証明しよう、あるいは私の作品を合奏の形で演奏してみたいと望むなら、作曲者の家にすればあらゆる楽器のための高音部譜表と低音部譜表に書かれた楽譜が全部揃っている。そしてそれを見にくるという名誉を作曲者になす者に対し、著者の曲集の理解を与えることになるのである。

### リュートを適切に演奏するために守るべき教程

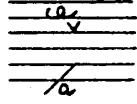
1. 左手の指先をフレットのできる限り直前に置かなければならない。
2. 和音を形成する音を保つために保指<sup>2</sup>を守る際、指を竿に押しつけなければならぬ。
3. 常に最初に弾かれる弦に〔左〕指を置き、後に他の指を置く。
4. 誤った音を避けるため下方の弦すべてに親指を留める<sup>3</sup>。
5. より良く〔リュート〕を身につけるために、学習中には弦を右手で打ってはいけない。
6. 可能な場合はいつでもカダンスをトランブルマンに結びつけ、均等に〔奏せ〕<sup>4</sup>。
7. すべての作品はゆっくり練習しなさい。文字〔=音〕を確実にし明瞭に演奏する習慣をつけるために。
8. 低音やその他の弦を親指で打ちつけないように注意し、混乱した音を避けること。
9. 弦はフレットの近くを指先で打ち、すべての指は常に弦のそばに保ちトランブルマンが揺れる<sup>5</sup>ことを避けよ。

### 私がこの曲集で使用する記号

1. トランブルマン<sup>6</sup>は文字の後に小さいコンマで示される。



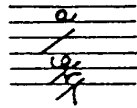
2. マルテルマン<sup>7</sup>は文字の後の小さなv字形 [で示される]



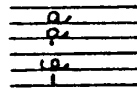
3. シュトあるいはトンベ<sup>8</sup>は文字の前の小さい逆さの ^ [で示される]。



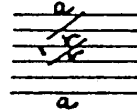
4. 2本の弦を親指で一緒にもしくは分けて弾くためにはこのようにする必要がある。



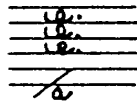
5. そして親指で1本の弦を弾き、さらに2本の弦を2本の指で弾くためには次のようにする。



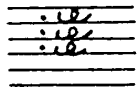
6. 大きな和音のアルペジオを同時もしくは別々に演奏する時、私はこのようにする。



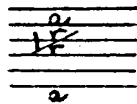
7. 点が各文字の脇でかつ後にある場合、それらすべてを第1指で弾く<sup>9</sup>。



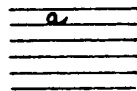
8. 点が文字の前にある場合第1指で逆方向に打つ<sup>10</sup>。



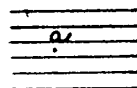
9. 2つのcの前の線は第1指で引きずるように弾くべきことを意味する<sup>11</sup>。



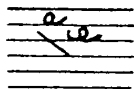
10. 文字の下に点がない場合はその弦を第2指で弾く。



11. 文字の下に点がある場合それを第1指で弾く。



12. 次のように2つの文字がある場合、第1指で奏せ<sup>12</sup>。



〔翻訳注〕

- (1) Lesure 1978では原文が'il'となっているがCallahan 1963によれば'je'である。
- (2) 弦楽器において、押弦した指を弾弦後必要な時間押弦した状態に保つ事。原語は'tenue'。
- (3) ゴティエの2冊の曲集でも言及されている、リュート奏法の基本。ただしこのように理由を記してはいなかった。親指での弾弦動作は上から下へと行われるが、その際弾弦し終わった親指を、空中にはねあげず、次の弦(位置的に「下方の弦」)にもたれ掛かるようにすること。こうすることで弦の中での親指の位置の把握が容易になる。この時期のリュートが11コースの弦を備えていることを考えると、有効な工夫であるといえる。
- (4) カダンスcadanceという語はこの時代トランブルマンtremblementとほぼ同義に用いられていた。ブロッサールの音楽辞典でも'TRILLO'の項目の中で「そしてこれこそまさにフランスでのカダンスあるいはトランブルマンである &c'est là proprement la Cadence ou le Tremblement à la Française.」と記されている。(Brossard, *Dictionnaire de musique*, 1703)。その場合多くの例が現代のターンに相当する音形を指示している事を考えると、ここでの記述はトリルにターンを付加することと解する事ができる。他方クプランのようにカダンスはムジュール「に結び付くべき精神と魂」と考える立場もあった(François Couperin, 『クラヴサン奏法』(Paris, 1717)、山田貢訳、シンフォニア、1976年、p.21)。さらに本来的な語意としては、終止の意味もある。また「均等に」という指示は同時代のヴィオールやクラヴサンの教程にもみられた(ドゥマシ, 『ヴィオール曲集』[Paris, 1685] 緒言, 『ジャン・ルソー著/ヴィオール概論』、関根敏子、神戸愉樹美共訳、アカデミア・ミュージック、1988年、p.171。またM.de Saint-Lambert, 『チェンバロ演奏の原則』[Paris, 1702]、山田貢訳、シンフォニア、1979年、p.18)。ただし不均等に奏するという記述もある(François Couperin, 前掲書p.14)。
- (5) 原語は'chevroter'; 「ヤギが鳴く」あるいは「震え声で話す(歌う)」の意。トランブルマンをトリルであるとすれば、左指が弦を打つ場所がフレットから離れて雑音が出ることを避けよといっているのであろうか。しかしC.P.E.バッハのような記述もある: 「トリラーを練習するときには、指をあまり高く上げてはいけない。そしてどの指も同じ高さに上げること。・・・手の力を抜かなければならない。でないとヤギの鳴き声のようにふぞろいなトリラーになる。」(C.P.E.バッハ, 『正しいピアノ奏法』(Berlin, 1753/1762)、東川清一訳、全音楽譜出版社、1985、上p.76)
- (6) 上からの倚音もしくは上からのトリル。
- (7) いわゆるモルデント。
- (8) 下からの倚音; シュトcheute (chute) という語はドゥマシの著作(前出注(4)参照)に、リュートではポール・ド・ヴォワ(すなわち下からの倚音)を示すと記されている。なおchuteもtombe共に「落下」、「落ちた」の意味があるが、左弦を叩く指の動作を考えると理解しやすい。ゴティエの2冊の曲集では共に'tomber'という動詞を使用している。ただし記号は文字の下

に円弧を記して表している。

(9)下から上にかき上げるアルペジオと考えられる

(10)(9)と逆に下方に打ち下ろすアルペジオ

(11)これにより中央の二つの音の発音順序が入れ代わり、複雑なアルペジオが奏される。

(12)この場合異弦するにもかかわらず、レガートな効果が得られる。装飾法というより技術的なレガート奏法。

### 参照文献表

- Bordas 'Gallot' in *Dictionnaire de la Musique, Les hommes et leur œuvres*, Paris: Bordas, 1986, pp.444-445.
- BötticherMGG Wolfgang Bötticher: 'Gallot' in *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, West Germany: Bärenreiter, 1955, IV, pp.1328-1329.
- Brenet1899 Michel Brenet: *Notes sur l'histoire du luth en France*, Torino, 1899/R1973.
- Callahan1963 Clare M.Callahan: *Jacques Gallot's Pieces de luth/a style study and critical edition*. Ohio State Univ., MA., 1963.
- Laurencie1928 Lionel de la Laurencie: *Les luthistes*, Paris, 1928.
- Lesure1978 François Lesure: Introduction in *Jacques de Gallot/PIÈCES DE LUTH/COMPOSÉES SUR DIFFÉRENTS MODES*. Genève: Minikoff, 1978.
- Massip1987 Catherine Massip: 'Recherches biographiques' in *Œuvres des Gallot*, Paris: Éditions du centre national de la recherche scientifique, 1987, XV-XXIII.
- New Grove Monique Rollin: 'Gallot' in *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, London: Macmillan, 1980, VII, p.131.
- Tessier1930 André Tessier: 'Quelques sources de l'école française de Luth du XVIIe siècle' in *Bericht über den I. Kongreß der IGMW*. Liège, 1930, 217.
- Œuvres des Gallot* *Œuvres des Gallot*, edition et transcription par Monique Rollin, Paris: Éditions du centre national de la recherche scientifique, 1987.
- Radke1960 Hans. Radke: 'Bemerkungen zur Lautenistenfamilie Gallot' in *Die Musikforschung*. XIII, 1960, I, pp.51-55.
- Rave1972 Wallace J.Rave: *Some Manuscripts of French Lute Music 1630-1700: An Introductory Study*. Univ. of Illinois, Ph.D., 1972.





[原文]

Monsieur

Si le choix que sa Majesté vient de faire de votre personne pour remplir une des premières charges du Royaume, fait connaître à toute la France la Justice qui est due à votre mérite; ainsi que le fait de votre nom pour donner le jour à mon Livre ne lui ferait pas moins connaître ma témérité; si on ne savoit pas que votre nom s'est acquis une réputation si grande, qu'il suffit pour rendre un Ouvrage considérable, et que ce ne l'ay fait Monsieur qu'après l'approbation que vous avez donnée aux pièces qui composent celui-ci, que je donne au Public sur l'assurance qu'ayant été à votre gré elles seront au sien et qu'il ne lira pas sans la passion que j'ay de vous en un parfait respect.



Monsieur

Votre très humble, très obéissant serviteur  
J. Gallot.

Advertisement

J'ay fait graver mon Livre pour le Public, après de catholiques réflexions. Si la le regard de luy plaire à la bonne heure, sinon ce ne sera ny de faute ny le mieux, ma intention sera toujours la même. Je n'ay pas eu dessein de l'entreprendre pour le justifier, ny pour prévenir le critique. Il n'y a que les bonnes choses qui se l'attribuent et les méchantes ne le méritent pas. Je ne prétends pas entrer dans plus d'avis. Long de m'en plaindre, j'ay bien de ma livre d'elle. quand elle m'accuse de piller le vieux Gentien, n'en fait faire plus d'honneur à mon ouvrage. Je ne suis une heureuse qu'on reconnoisse les pièces qui me sont dues à ce que j'écris, ceux qui s'en ont obligés sont tous les dans un méchant goût, tant pour la composition que l'exécution, cela se voit dans les parties des pièces. Si quelque Commissionnaire veut s'enquérir ce que je dis, ou faire exécuter mes pièces en Court, il trouvera toute les parties tirées de cette ou de ces d'elles sur toutes sortes d'inscriptions de Musique et de l'usage de son livre à ceux qui lui font l'honneur de le venir voir.

- 1. Mettre de quel côté l'observance pour éviter l'effet du batt.
- 2. Il faut mettre le bout des doigts de la main gauche le plus près des touches que faire se pourra.
- 3. Serrer les doigts sur le manche en descendant les touches pour empêcher les sons qui font harmonie.
- 4. Serrer toujours les doigts sur les cordes qui doivent être pincées les premières, et lâcher les autres après.
- 5. Carreter le pouce sur toute les cordes par le mouvement de la main pour éviter les fautes de la main.
- 6. Ne serrer pas les cordes de la main droite lors qu'on s'élève, pour s'en rendre mieux la main.
- 7. Pincer les cadences avec tremblement autant qu'il est possible de le faire, et également.
- 8. Serrer les cordes de la main gauche pour s'écarter des lettres et pour l'habileté pour jouer nettement.
- 9. Pincer les cordes de la main gauche par les touches et les autres cordes par le pouce, ou s'empêcher de pincer.
- 10. Serrer les cordes de la main gauche de tout des doigts, et tenir toujours tous les doigts près des cordes et éviter de faire chanceler le tremblement.

Exemple des marques dont je me sert dans les pièces de ce livre.

1. Le tremblement à main d'une petite vitesse, après de l'acte

2. Le mouvement d'un acte de fait & après de l'acte

3. Le signe de l'acte par un petit A renversé avant le batt.

4. Les pièces dans celles de la main gauche ou devant il faut faire ainsi

5. Le pouce en pincer de la main d'une dans le fait de l'acte de l'acte de l'acte

6. Le signe de l'acte par un petit A renversé devant le batt.

7. Le signe de l'acte par un petit A renversé devant le batt.

8. Le signe de l'acte par un petit A renversé devant le batt.

9. Le signe de l'acte par un petit A renversé devant le batt.

10. Le signe de l'acte par un petit A renversé devant le batt.

11. Le signe de l'acte par un petit A renversé devant le batt.

12. Le signe de l'acte par un petit A renversé devant le batt.

